

大沢を救った新聞

6年 S・Yさん

この本は代々新聞作りを行い、多くの賞を受賞している大沢小学校が、東日本大震災の時、どのようなことをしたのか、その次の年度でどのような新聞を書いたのかに密着している本です。

私は、震災が起きた時に児童会長をしていた奈緒さんが、家族の安否も分からず不安な中、大沢の人たちが頑張っている姿を見て、友達と共に自分たちにも何かできることはないかと行動を起こそうとしていたことに感動しました。もし奈緒さんと同じ立場に私がいたら、奈緒さんのように避難してきた人のために何かやろうと思えたとしても、家族が元気がどうかも分からず、不安な中で行動には移せなかったと思います。奈緒さんや大沢の人は強くて団結力があるのだなと感じました。

特に印象に残ったところは、震災の次の年度の全国新聞コンクールで内閣総理大臣賞を受賞したことです。先輩たちからの思いを受け継ぎ、新聞を読んだ人が少しでも明るい気持ちになってほしいと願い、頑張った執行部の人たちは、余震やボヤがあったりと落ち着けない状態で活動しなければなりませんでした。その上、昨年度より少ない人数で新聞を書かねばならず、さぞ大変だったと思います。そんなひたむきな努力が報われて、内閣総理大臣賞を受賞できたことは、震災後の生活に疲れていた大沢の人たちの希望になったのだと思います。

この本で筆者は、子供には信じられない力があり、その力が誰かを動かす力にもなるということを伝えたかったのだと思います。震災後の大沢小に避難してきた大人たちは、まず子供たちを守ろうとしました。子供たちは頑張る大人の姿を見て自分たちには何ができるのかを考え、肩揉み隊活動やトイレ掃除を行いました。そんな子供たちの姿を見て、最初は動けないでいたお年寄りも畑を作り、雑巾を縫いました。震災後の暗い海に光が差すように、子供たちの行動が途方に暮れていたお年寄りの光となったのだと思います。

今年、私の学校では九十周年記念式典が予定されており、PTAの方や先生方が様々な準備をしてくださっています。私は代表委員会の仕事として、劇の台本を考える担当になりました。時に仲間と意見が割れ、話し合いが上手くいかないこともあります。協力してくださる保護者や先生方から力をもらい、その力を学校のみんなに楽しんでもらえるような、誰かが変わるきっかけになるような本にかえられたらと思います。